

# デメテル (Demeter) と母たち (Mütter)

## ～ゲーテのシチリア旅行に関する研究のための予備的考察～

渡 部 重 美

### はじめに

『ファウスト』第2部第1幕「暗い廊下」の「母たち」の場面でファウストは、女の典型であるヘレナと男の典型であるパリスを連れてくるように皇帝から要請を受ける。メフィストによれば、その使命を果たすためには道なき道を進み、時間も空間もない「母たち」の世界へ下りて行く、あるいは、上って行かなければならない。「母たち」と聞かされた時にぞっと身震いするファウストだが、メフィストから渡された、手の中で大きくなり光り輝く鍵を頼りに出かける。目印となるのは、三脚の鼎 (Dreifuß) である<sup>1)</sup>。

この場面は、シチリア (Sicilia) 島を訪れたゲーテ自身の体験が文学的に形象化されたものであると筆者は考える。本論考では、シチリア島と関係の深い穀物女神デメテルと、プルタルコス (Plutarchos, 46 頃-120 頃) 『英雄伝』やディオドロス (Diodoros Siculus, 前 90 頃-前 21 頃) 『歴史叢書』で女神として言及されている母たちとの同質性を中心に据えて論じ、この両者が結びつい

---

\* 古代ギリシアの地名や人名、ギリシア・ローマ神話に登場する固有名詞などのカタカナ表記については、訳書などから直接引用する場合を除いて、主にデジタル版『日本大百科全書 (ニッポニカ)』小学館にしたがった。

1) Vgl. Johann Wolfgang Goethe: Faust. Der Tragödie zweiter Teil. In: Ders.: Letzte Jahre 1827-1832. Münchner Ausgabe (=MA), Bd. 18.1. Hrsg. von G. Henckmann und D. H.-Lohmeyer. München (Carl Hanser Verlag) 1997, S. 103-351, hier S. 154-158.

て上記「母たち」の場面が出来上がった経緯を考察することによって、シチリア旅行がその後のゲーテの詩作や考え方に対して持った意味、与えた影響について研究するための予備的作業としたい。

## 1. デメテル

アグリジェント (Agrigento) を出発したゲーテは、「ある種のわがままな気まぐれ」<sup>2)</sup>によって、シチリア島が農耕神ケレス、つまりデメテルによって特別に恵みを与えられた土地であることを確かめるために、海岸線をシラクーザ (Siracusa) 経由で島の東部カタニア (Catania) に抜けるのではなく、内陸部へ向かうことにした。馭者の勧めもあつてのことである。そして、アグリジェントからしばらく北東に進んだところにあるカルタニセッタ (Caltanissetta) に着くと、大麦や小麦が植えられた肥沃な土地が眼前に開け、ここで初めてシチリア島が「イタリアの穀倉」<sup>3)</sup>という栄えある名前を得た理由を理解することになった。

ゲーテがシラクーザを諦めて島の内陸部へ向かった理由については、旅行案内として使用していたリーデゼル (Johann Hermann Freiherr von Riedesel, 1740-1785) の『シチリア島と大ギリシアをめぐる旅』に記されたシラクーザに関する否定的な描写の影響も考えられる<sup>4)</sup>が、カルタニセッタの先にあるカストロ・ジョヴァンニ (Castro Giovanni)、つまりエンナ (Enna)<sup>5)</sup>のあたりに伝わる神話への興味が大きかったことは間違いないだろう。それゆえ、エン

2) Johann Wolfgang Goethe: Italienische Reise. MA, Bd. 15. Hrsg. von A. Beyer und N. Miller in Zusammenarbeit mit Chr. Thoenes. München (Carl Hanser Verlag) 1992, S. 348.

3) Goethe: Italienische Reise, S. 348.

4) Vgl. Johann Wolfgang Goethe: Italienische Reise. Teil 2. Hrsg. von Chr. Michel und H.-G. Dewitz. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag im Taschenbuch, Band 48) 2011, S. 1346 (Kommentar).

5) エンナの名前の変遷、およびその歴史の概略については、Goethe: Italienische Reise. Teil 2, S. 1347 (Kommentar); Goethe: Italienische Reise, S. 1051-1052 (Kommentar) 参照。

ナで不愉快な思いをしたゲーテは、「神話の名前に誘われて旅の目的地を定めるようなことは二度としない」<sup>6)</sup>と心に誓ったのである。カルタニセッタの単調な景色から逃れるためにほしいと思った「トリプトレモスの竜車」<sup>7)</sup>もまた、神話との関係を示唆している。「三度耕した畑」を意味するトリプトレモスは、デメテル、その娘ペルセフォネと並んでエレウシスの密議では重要な存在である<sup>8)</sup>。その竜車（翼を持つ竜を繋いだ戦車）とは、デメテルから麦の栽培を習い、それを世界中に広める使命を負ったトリプトレモスが、使命遂行のために女神からもらったものである。

シチリア島にはさまざまな神話が伝承されている。例えばキケロ (Marcus Tullius Cicero, 前 106-前 43) は、ウェッレース (Gaius Verres, 前 115 頃-前 43) が総督として赴任したシチリアで行ったさまざまな暴虐、彫像や美術・工芸品の強奪・窃盗などに対する不法利得返還を求める裁判での弾劾演説の中で、シチリア島全土にデメテル・ペルセフォネ両女神に対する信仰がいかに古くから深く根づいているかを紹介し<sup>9)</sup>つつ、エンナの町に建てられたデメテル神殿の壮大さや、神殿の中、あるいは神殿前の広場に置かれたデメテル、ペルセフォ

6) Goethe: *Italienische Reise*, S. 352. ちなみに、エンナにおけるゲーテの不愉快な体験とは、宿の部屋にシャッターはあっても窓ガラスがなかったため、(シャッターを閉めて) 暗闇の中に座っているか、(シャッターを開けて) 霧雨を浴びるかの二者択一しかなく、しかも、わずかに残っていた蓄えを食べ尽くして惨めな夜を過ごしたことである。

7) Goethe: *Italienische Reise*, S. 349.

8) ホメロス、香掛良彦訳「デーメーテル讃歌」(同『ホメロスの諸神讃歌』ちくま学芸文庫、本文：16-47、訳註：48-105、解題：106-122 ページ)、68 ページ(訳註 51) 参照。

9) キケロー、大西英文訳「ウェッレース弾劾Ⅱ 第二回公判弁論 第四演説」(岡道男、片山英男、久保正彰、中務哲郎編集『キケロー選集 5 法廷・政治弁論Ⅴ』岩波書店、194-322 ページ)、283-286 ページ参照。ちなみにキケローは、両女神がシチリア島で生まれたこと、この地で初めて穀物(小麦)の栽培を発見したこと、ペルセフォネが「シチリアのへそ」であるエンナ近くの洞から現れたハデスによって略奪されたこと、ペルセフォネを連れ去ったハデスはシラクサーザから遠くないところで冥界に下り、その場所には忽然と湖ができたこと、娘を探し回るデメテルはエトナ (Etna) 山の噴火口で松明に火を灯したことなどを伝えている。

ネ、トリプトレモスの彫像の大きさなどをつぶさに伝えている<sup>10)</sup>。また、キケロより少し後の、シチリア島出身の歴史家ディオドロスは『歴史叢書』の中で、島民の間で語り継がれている神話、とりわけデメテルとペルセフォネ両女神にまつわるいくつかの神話を断片的に伝えている。ディオドロスの伝える、デメテルとペルセフォネにまつわる神話を、参照した訳書の記述に沿って簡条書きの形でまとめると、以下のようになる<sup>11)</sup>。

①	シチリア島は、デメテルの娘ペルセフォネと冥界の王ハデスが結婚した際に、ゼウスがペルセフォネに贈った島である
②	デメテルとペルセフォネが島に現れて以降、世界で初めてこの島に野生の小麦が生えたため、両女神はとりわけ島民から大切に祀られている
③	ペルセフォネがハデスによって略奪されたのは、「シチリアのへそ」と呼ばれるエンナに面した、「上方が平坦で隅から隅まで水に潤い、周囲は高くどこから見ても断崖で、高く切り立ったようになっている」牧野であった
④	牧野のまわりの沼沢地には大きな洞があり、この洞の裂け目からハデスが戦車を駆って現れ出てペルセフォネを略奪した
⑤	ペルセフォネと一緒に育った処女神アテネとアルテミスもこの島を気に入り、三人でこの島の土地を分け合い、父ゼウスのために衣装の制作をしていた
⑥	ハデスはシラクサーザ近辺でペルセフォネを略奪し、戦車で連れ去り、大地を引き裂いて冥界に下ったが、その跡にキュアネ (Kyane) の泉を湧出させた

10) 実際、エンナの東端には近くの穀倉地帯を見下ろす岩盤が突き出ており、「ケレスの岩 (Rocca di Cerere)」と呼ばれている。この岩盤の下方で、デメテル祭式の大祭司の存在を示すとおぼしき文言が刻まれた、紀元前4世紀末から紀元前3世紀頃の碑文が発見された。また、キケロが描写している神殿前広場のデメテルとトリプトレモスの彫像をそれぞれ刻印した、これらの像が設置された際に鑄造されたと思われる紀元前3世紀後半頃の硬貨も見つかっている。しかし、この「ケレスの岩」は、神殿を建てたり巨大な彫像を置くにはあまりにも小さすぎ、せいぜい小さな祭壇があった程度ではないかと考えられる。デメテル崇拜の聖域はもっと西のロンバルディア城 (Castello di Lombardia) のあたりにあった可能性が高いが、考古学的発掘調査ではこの推測を裏づけるものは見つかっていない。Vgl. Valentina Hinz: Der Kult von Demeter und Kore auf Sizilien und in der Magna Graecia. Wiesbaden (Dr. Ludwig Reichert Verlag) 1998 (Palilia; Bd. 4), S. 121-124.

11) ディオドロス、飯尾都人訳「神代地誌」(飯尾都人訳『ディオドロス「神代地誌」、ポンポニウス・メラ「世界地理」、プルタルコス「イシスとオシリス」』龍溪書舎、9-469ページ)、386-390、445-446ページ、訳注67-68、75ページ参照。

⑦	デメテルは、エトナの噴火口から灯りを取って人間の住む諸国をめぐり、歓迎してくれた人々にお礼として小麦の種を贈った
⑧	デメテルは、誰よりも欲待してくれたアテネの人びとにシチリアの島民に次いで小麦の種を贈り、アテネの人びとは誰よりも丁重にこの女神を敬いエレウシスでの入信祭儀を捧げて祀ったため、この祭儀はあまねく評判となった
⑨	シチリア島民は、小麦の種まきが始まる時期になるとデメテルへの供犠と例大祭を、小麦の実が熟する頃になるとペルセフォネの冥界からの帰還を記念する供犠と例大祭を執り行った
⑩	特にデメテルの祭りは壮大で、その期間中、顔を合わせた際は男女の戯言を口に出す習慣があったが、これは、ペルセフォネを略奪されて嘆き悲しむデメテルがそうした戯言を聞いて笑ったことに起因する
⑪	野生の小麦の発見と、これを食料として栽培することを人々に教えた両女神の功労は大きく、また、二人の導入したいくつもの法にしたがって人々は正しく行動する習慣が身についたため、二人には「テスモポロス (掟授けの)」 <sup>12)</sup> という異名がつけられた
⑫	デメテルは、小麦がまだ人間たちに気づかれずに他の植物にまじって自生しているのを初めて収穫し、栽培と貯蔵の方法を考え、種まきを教えた
⑬	ペルセフォネがハデスに略奪された後、デメテルは小麦の実をすべて焼いてしまったが、ゼウスとの間で和解が成立すると、トリプトレモスに小麦の種を与え、すべての人間に分配し種まきの方法を伝授するように命じた
⑭	シチリア島はデメテルとペルセフォネの神島であり、前者は島内に住み、後者の略奪も島内で起きたことは誰もが一致して認めているため、小麦の種を最初に分かち与えられたのは自分たちであると島民は考えている

ところで、デメテル、そして冥界の王ハデスによるペルセフォネ略奪にまつわる神話にはいろいろなバリエーションが存在するが、現存する最古のものが「デメテル讃歌」である。現在の形になったのは紀元前7世紀頃と推定されているが、『イリアス』や『オデュッセイア』と同じように、恐らくはその何百年も前から口承により語り継がれてきたものである<sup>13)</sup>。概要は次のとおりであ

12) アテネをはじめとしたポリスで女性だけで行われた、デメテルとペルセフォネに捧げられる「テスモボリア祭」の起源を示している。

13) Vgl. Lucilla Burn: Griechische Mythen. Eine Einführung. Aus dem Englischen übersetzt von I. Rein. Mit 51 Abbildungen und 1 Karte. Stuttgart (Philipp Reclam jun.) 2016, S. 13–14.

る<sup>14)</sup>。

ペルセフォネがオケアノスの娘たちと牧野で花を摘んでいたところ、大地が裂けてハデスが馬を駆って現れ、泣き叫ぶ彼女を無理やり連れ去った。これは、ハデスの兄弟であるゼウスの了解のもとに行われた略奪だった。ペルセフォネは甲高い声を上げて父ゼウスの名を呼び、ヘカテとヘリオス、そして、母であるデメテルもこだまを介して間接的にこれ聞いた。デメテルはその後9日間、飲食も沐浴もせず松明を手に娘を探し回り、10日目にヘカテと合流してすべてを見守っているヘリオスのもとを訪れ、事件の真相を知った。悲嘆にくれるデメテルは、ゼウスに対して激しい怒りを抱き、オリンポスからも身を遠ざけて長いこと人間世界をめぐり歩き、もはや女神とは思えない姿でエレウシスを治めていたケレオスの館にたどり着いた。井戸端に座りこんでいるデメテルを見かけたケレオスの娘たちは、母親メタネイラに取り次ぎ、デメテルはその息子デモフォンの乳母となる。

デメテルは、デモフォンを不老不死の身にすべく夜な夜な火の中に埋めていたが、この様子を覗き見たメタネイラが悲痛な叫び声をあげると腹を立て、小高い丘に大きな神殿を建造し、自ら教える祭儀を今後とも恭しく執り行うように命じ、女神の姿を現した。この命令にしたがってケレオスが神殿を建造し終えると、デメテルは神殿に引きこもり、さらに、穀物の種を大地に隠してしまう。こうして大地は実を結ばなくなり、人間たちは飢餓に苦しみ、その人間の供物に依存していた神々も苦境に立たされることになった。ゼウスは次々と使者を送ってデメテルの怒りを解こうとしたが無駄で、ついにヘルメスを冥府に送り、ハデスを説得してペルセフォネを母デメテルのもとへ連れ戻すことに成功する。母娘は再会を喜んだものの、地上界へ戻る際にハデスによって甘いザクロの実を一粒食べさせられたペルセフォネは、一年の三つの季節のうち一つを冥界で過ごさなければならなくなった。

ゼウスはさらに、自分やハデス、そしてデメテルの母であるレアを送り、デ

---

14) 以下、「デメテル讃歌」の概要については、ホメーロス「デーメーテール讃歌」、16-47ページ参照。

メテルをオリンポス山へ連れ戻そうとする。レアの説得に応じたデメテルは、大地が再び実りを結ぶようにした後、ケレオスやトリプトレモスに（エレウシスの）密議を開示し、オリンポスの神々のもとに帰った。

穀物（小麦）栽培の始まり、季節の移り変わりの縁起、そして、エレウシスの密儀の創始として読み解かれるデメテルとその娘ペルセフォネ略奪の神話だが、上述した最古のバリエーションでは、穀物の栽培はデメテルが神殿に引きこもる以前からすでに行われていたこととして話が進んでいる。両女神とシチリア島、そしてエンナとの関係についてはまったく触れられておらず、また、ゲーテが言及しているトリプトレモスは、ケレオスとともに密儀を開示されたエレウシスの領主の一人という設定になっている。さらに、トリプトレモスがデメテルから竜車をもらい、麦の栽培を世界に広めたというエピソードについても触れられていない。

実際、デメテル・ペルセフォネとシチリア島が結びつけて語られるようになるのは、上記「デメテル讃歌」より後の時代のことである。その最古の文献と考えられているのが、ヘロドトス（Herodotos, 前 484 頃-前 420 以前）の『歴史』である。ギリシアの植民都市ゲラ（Gela）の僭主ゲロン（Gelon, 前 540 頃 - 前 478）に言及している箇所、彼の祖先の一人が「地下女神」の「神器の功德」によって市民の内乱を治めたことがきっかけとなって、その子孫が代々この信仰の祭司を司ることになったとの記述がある<sup>15)</sup>。しかし、「地下女神」をすぐにデメテル・ペルセフォネのことだと考えてよいかどうか<sup>16)</sup>、ヘロドトスの記述を論拠にして、ゲロンを含むデイノメネス（Deinomenes）家の僭主たちがこの両女神信仰を勢力拡大、人民支配のために意図的・政治的に利用したことによりシチリア島全土に広まったのかどうかについては、いろいろな議論があり断定的なことは言えない<sup>17)</sup>。

15) ヘロドトス、松平千秋訳『歴史（下）』岩波文庫、114 ページ参照。

16) 上記岩波文庫の訳注では、「地下女神」はデメテル・ペルセフォネ両女神のことだと断定している。ヘロドトス『歴史（下）』、382 ページ（訳注 114-2）参照。

17) Vgl. Hinz: Der Kult von Demeter und Kore auf Sizilien und in der Magna Graecia, S. 21-25.

デメテルとペルセフォネにまつわる神話に関してはむしろ、空間的な広がり  
と時間的な幅の二つの軸で、つまり、地域による差異と歴史の変容の過程を踏  
まえて理解する必要がある。シチリア島の都市や地域ごとにそれぞれの特異情  
事を反映したローカル神話が存在しており、そのどれもがその土地の豊饒さを  
説明するためにデメテルあるいはペルセフォネの話を用いた、言い換えれば、  
両女神の神話は地域による違いはあっても、そのどれもがシチ  
リア島の豊饒さを隠喩的に表現するものだったと考える方がよいだろう。例え  
ば、ディオドロスの伝える①や⑤に対して、エトナ山周辺の土地をめぐりデメ  
テルとヘファイストス<sup>18)</sup>が争ったという神話があり、また、ディオドロスの③  
と④、⑥に加えて、ペルセフォネはエトナ山近辺で略奪されたとの話もある。  
エンナの牧野にしてもエトナ山の山腹にしてもシラクーザの平野にしても、い  
ずれも非常に肥沃な土地である。さらに、キュアネの泉もエンナ南方のペル  
グーサ (Pergusa) 湖近くの洞穴も、冥界への入り口を連想させるものである。

これらのローカル神話が、紀元前4世紀頃から次第に整理・統一され、デメ  
テルとペルセフォネはシチリア島で生まれシチリア島に暮らし、後者はエンナ  
近くでハデスに略奪され、シラクーザ近辺で冥界に連れ去られた。小麦栽培を  
創始したデメテルは、最初はシチリア島内で娘を探したが、搜索範囲を他のギ  
リシア世界にも広げ、ついにエレウシスへやって来た、といった形にまとめら  
れていった。その一方で、ディオドロスの伝える⑤のように、背景へ退いて  
いった神話もある。この神話の整理・統一をおこなったのはティマイオス  
(Timaios, 前356頃 - 前260) と考えてほぼ間違いない<sup>19)</sup>。ティマイオスは、ギ  
リシア神話を西方に移植して多くの新しい神話を創出し、この地方が太古より  
ギリシアの影響下にあり、古い歴史を持っていて、ギリシア本土に決して引け  
を取らないことを証明しようとした。

18) ギリシア神話に登場する火と鍛冶の神。

19) キケロもディオドロスもティマイオスを典拠にしているとの説がある。キケロー  
「ウェッレウス弾劾Ⅱ 第二回公判弁論 第四演説」、283ページ(48節の注(2))  
参照。



このように形を整えたデメテル・ベルセフォネ神話は、しかし、シチリア島のいくつかの土地が混在して登場する点、エンナのような内陸部の都市が中心的役割を演じている点でギリシア人の入植、ギリシア文化の移植がかなり進んだ頃の状況を反映しており、また、デメテル崇拜の優位性をめぐってエレウシスの密儀に対抗しようとしている点で、アテネを中心としたアッティカ地方の神話がギリシア世界全般に広まり認知された後のものであることを示している<sup>20)</sup>。ちなみに、エレウシスの密儀との関係でアッティカ系のトリプトレモスが存在感を増すのも、この密儀がアテネの影響下に置かれるようになって以降のことである<sup>21)</sup>。

エンナに向かうゲートの念頭にあった神話を特定することは難しいが、イタリア旅行に出発する前の彼の読書履歴を確認すると、ある程度の絞り込みはできるだろう。

まず、ゲートが上述したディオドロスの『歴史叢書』を読んだのは、1812年12月5日から1813年1月15日の間である<sup>22)</sup>。イタリアから戻ってだいぶ時間経ってはいるが、『イタリア紀行』のナポリとシチリアの部分が発行され

20) 以上、シチリア島に伝わるローカル神話がティマイオスによって統一され一種のトポスにまで仕立て上げられた過程に関しては、Hinz: Der Kult von Demeter und Kore auf Sizilien und in der Magna Graecia, S. 26-28 参照。

21) ホメーロス「デーメーテル讃歌」、68 ページ (訳註 51)、115 ページ (解題) 参照。ちなみに 68 ページでは、アテネ影響下の神話のバリエーションの一つとして、ギリシア神話の原形をとどめていると言われるアポロドロス (Apollodoros, 生没年不詳) から、トリプトレモスおよびその竜車に関する箇所「(デメテルは) しかしメタネイラの子供の中での兄であるトリプトレモスに有翼の竜の戦車を造ってやり、小麦を与えた。彼は空を飛んで人の住んでいるすべての地にこれを播いた」が引用されている。アポロドーロス、高津春繁訳『ギリシア神話』岩波文庫、37 ページ (カッコ内は筆者による、また、漢字のルビは省略)。

22) Vgl. Goethe als Benutzer der Weimarer Bibliothek. Ein Verzeichnis der von ihm entliehenen Werke. Beab. von E. von Keudell. Hrsg. mit einem Vorwort von W. Deetjen. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1931, S. 129. ゲートが読んだのはシュトゥーロート (Friedrich Andreas Stroth, 1750-1785) およびカルトヴァッサー (Johann Friedrich Salomon Kaltwasser, 1752-1813) によるドイツ語訳の第 1 巻から第 6 巻で、このうち最初の 5 巻が各国の神話を収録している。

たのは1817年なので<sup>23)</sup>、その編集作業の過程でディオドロスから得た情報が盛り込まれた可能性はある。ディオドロスについては、次章で述べる母たちとの関連で後ほど改めて取り上げたい。

また、ゲーテが初めてホメロスを知ったのは、聖カタリーナ教会で牧師をしていた叔父の蔵書にあった散文訳『ホメロスのトロヤ王国征服記』を通してである<sup>24)</sup>。『詩と真実』にもホメロスに関する言及があり、ホメロスの作品と集中的に取り組んだ記録も残ってはいるが、イタリア旅行へ出発する前に「デメテル讃歌」を読んでいたかどうかははっきりしない<sup>25)</sup>。キケロについても、大咯血をしてライプツィヒでの学業を中断しフランクフルトの親元で療養している期間中に読んでいた記録があり、『詩と真実』でも若干触れられてはいるが、上に引用したウェッレスに対する弾劾演説を読んでいたかどうかはわからない<sup>26)</sup>。

一方でゲーテは、法律の勉強をするためにライプツィヒへ向かう頃（1765年9月30日）までに、約2000冊を数える父親の蔵書を利用して広範囲にわたる読書をしており、その読書履歴の中にはオウィディウス（Publius Ovidius Naso, 前43-後18）の『変身物語』が含まれていた<sup>27)</sup>。『詩と真実』によれば、ゲーテは『変身物語』の特に最初の数章を暗記するくらい熱心に読み込んでおり、この読書から得た神話的形象、人物、事件や出来事などに絶えず手を加えてみたり、復唱してみたり、再現してみたりしていた<sup>28)</sup>。ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744-1803）から、「ここにはギリシアもなければイタリアもなく、太古の世界もなければ文明開化した世界もなく、むしろ、すべてがす

23) Vgl. Rose Unterberger: Die Goethe-Chronik. Frankfurt am Main und Leipzig (Insel) 2002, S. 358.

24) Vgl. Johann Wolfgang Goethe: Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. MA, Bd. 16. Hrsg. von P. Sprengel. München (Carl Hanser Verlag) 1985, S. 47.

25) Vgl. Goethe: Dichtung und Wahrheit, S. 296, 526, 586, 697, 807; Unterberger: Die Goethe-Chronik, S. 15, 30.

26) Vgl. Unterberger: Die Goethe-Chronik, S. 20-21; Goethe: Dichtung und Wahrheit, S. 280, 439, 574.

27) Vgl. Unterberger: Die Goethe-Chronik, S. 15.

28) Vgl. Goethe: Dichtung und Wahrheit, S. 37-38, 177.

でに存在していたものの模倣であり、過度に洗練された者にのみ期待し得る型にはまった描写である」と痛烈な批判を受けるまでは、『変身物語』はゲーテの愛読書であった<sup>29)</sup>。

その『変身物語』では、「デメテル讃歌」とはかなり異なる形でペルセフォネ略奪の話が紹介されている<sup>30)</sup>。まず、その舞台がシチリア島エンナの町からほど遠くないところにある湖<sup>31)</sup>を囲む森と特定されている。さらに、ペルセフォネ略奪はゼウスではなくウェヌスによって仕組まれたもので、ペルセフォネを乗せた冥界の王ハデスの馬車は、シラクάζにあるキュアネの泉の底から冥府に下って行く。デメテルは、エトナ山で松明に火を灯して娘を探し回り、キュアネの泉で彼女の帯を発見する。デメテルの怒りは、もっぱら娘失踪の手がかりを見つけたシチリアに向けられ、この地を不毛な土地に変えてしまう。ゼウスのとりなしによってペルセフォネは天界へ戻れることになるが、散歩中にみずから冥界のザクロを7粒食べてしまったことにより一年の半分を天界で、もう半分を冥界で過ごさざるを得なくなる。これに続いて、デメテルは「二頭の竜を車につなぎ、轡をその口にあてがうと、天地をさかいする大気のなかを飛行して、軽やかな車を、アテナイの都市へと進めました。そこに着くと、その車をトリプトレモスに渡したうえ、もろもろの種子を彼に与えて、一部を荒地地にまき、一部を長期間の休閑地にまくように命じました」<sup>32)</sup>と、トリプトレモスのエピソードが語られている。内容的には、キケロやディオドロスの伝える話に近いと言える。

以上のような諸事情を考え合わせると、エンナに向かうゲーテの念頭にあったのはオウィディウスの『変身物語』で語られている神話、あるいは、少なく

---

29) Vgl. Goethe: Dichtung und Wahrheit, S. 444-445.

30) 以下、オウィディウスが語る神話の概略については、オウィディウス、中村善也訳『変身物語 (上)』岩波文庫、195-218 ページ参照。なお、固有名詞については、「デメテル讃歌」等との比較を容易にするために、直接引用の部分以外はギリシア神話における呼称、あるいは現代風に改めている。

31) 上述したペルグーサ湖のこと。

32) オウィディウス『変身物語 (上)』、216-217 ページ (漢字のルビは省略)。

ともオウィディウスの『変身物語』をその一例とする、エレウシスの密議がアテネの影響下に置かれて以降の、整理・統一された神話のバリエーションだったと考えてよいだろう。

## 2. 母たち

エッカーマン (Johann Peter Eckermann, 1792-1854) によれば、ゲーテは「母たち」の場面を執筆するに際して、古代ギリシアの伝記作家・エッセイストであり、デルフォイの神官も務めていたプルタルコスを参照し、母たちが古代ギリシアでは神として語られていたことを知ったが、それ以外はすべて自身で創作した<sup>33)</sup>。

ゲーテがカルトヴァッサー訳でプルタルコスの『英雄伝』と『モラリア』を読んだのは、1811年5月17日から6月28日のカールスバート滞在期間中のことであり<sup>34)</sup>、「母たち」のモデルが登場するのは『英雄伝』の中の、ポエニ戦争を戦ったローマの軍人・政治家マルケルス (Marcus Claudius Marcellus, 前268頃 - 前208) に関する部分である。熱烈なカルタゴびいきの町エンギュイオン (Engyon) で、ローマを支持するニキアスが、町の人々に捕らえられカルタゴ側に引き渡されそうになった際、母たちと呼ばれる女神を冒瀆するような言動をわざととり、しかも演説中にマテライ女神に憑かれた演技をして、震え上がる人々を尻目に難を逃れたことを伝えている箇所である。その前段で、エンギュイオンの町、および女神に関する次のような説明がある。

シケリアにエンギュイオンという町があって、これは大きな町ではないが、非常に古く、マテライ、母たちと呼ばれる女神が現れたもうたことで

33) Vgl. Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens. In: Johann Wolfgang Goethe: MA, Bd. 19. Hrsg. von H. Schläpfer. München (Carl Hanser Verlag) 1986, S. 348.

34) Vgl. Unterberger: Die Goethe-Chronik, S. 302.

有名であった。その女神たちを祀る社はクレタ人が建てたものと言われ、奉納されている槍や青銅の兜の中には、メリオネスあるいはウリクセス、つまりオデュッセウスが、女神に奉納したという銘文が刻まれているものがあった。<sup>35)</sup>

また、ディオドロスは、エンギュイオンの町がクレタ人によって建設された経緯を次のように伝えている。

クレタのミノス王のもとから息子イカロスを連れて逃げ出した工匠ダイダロスは、シチリア島にたどり着いた。これを知ったミノス王はシチリア島へ遠征したが、謀殺され、軍船を焼かれてしまったクレタの軍勢の一部はそこに留まって自分たちの町ミノイアを建設し、残りは内陸部へ進んで要害の地に町を築き、エンギュイオンと命名した。そして、次第に勢力を増したクレタ人たちは、もとはクレタ島で祀られていた母神の神域を造営し、大切に祀ったため、その靈験によって母神域はととも栄えることになった<sup>36)</sup>。

エンギュイオンの地理的位置は画像1の示すとおりで、エンナから北へ27キロのあたりにあり、現在のエンナ県トロイーナ (Troina) であるとの説もあるが、はっきりとしたことはわかっていない<sup>37)</sup>。この町に現れた女神、母たちは、もとはクレタ島で祀られていた女神とのことだが、これに関連して興味深いのは、「デメテル讃歌」でデメテルがケレオスの娘たちに、自分はドースと

---

35) 以上、直接引用部分も含めて、『英雄伝』の当該箇所については、プルタルコス、柳沼重剛訳『英雄伝2』（西洋古典叢書）京都大学学術出版会、423-425 ページ参照。

36) プルタルコス『英雄伝2』、425 ページ（注(1)）；ディオドロス「神代地誌」、373-376 ページ、訳注 66 ページ参照。ちなみに、プルターク、河野与一訳『英雄伝(四)』岩波文庫、166 ページでは、「マテライ」について「母たちの意、ローマ人の云ふマーグナ マーテル、ギリシャ人の云ふレアーに當りフリュギアーの女神キュベレーと混同されてゐる」との注がついている。

37) プルターク『英雄伝(四)』、166 ページ；ディオドロス「神代地誌」、訳注 66 ページ参照。なお、画像1の地図上では、エンギュイオンではなく、エンギュイウムと表記されている。

いう名前で、海賊たちにいやいやクレタ島から連れてこられたのだ<sup>38)</sup>と身の上話を語っている点である。この身の上話がオデュッセウスにも見られるパターン化された常套手段としての虚偽の身の上話にすぎない<sup>39)</sup>としても、デメテルはクレタ島でイアシオンと結ばれて富の神プルトスを出産しており<sup>40)</sup>、クレタ島と関係がないわけではない。一方でまた、エンギュイオンの母たちがクロノスに隠れてゼウスを養育したレアに相当する<sup>41)</sup>のだとしたら、この女神たちはデメテルの母親ということになる。

オリンポスの神族の系譜によれば、ウラノスとガイアからクロノスとレアが生まれ、クロノスとレアからゼウス、デメテル、ハデス、ヘステシア、ヘラ、ポセイドンが生まれ、さらにゼウスとデメテルからペルセフォネが生まれた<sup>42)</sup>。

しかし、デメテル (Demeter) については、その名前のデ (de) が「大地」を意味するゲー (ge) の変音したもので、メテル (meter) は明らかにギリシア語の「母」なので、結局「大地母神 (Terra Mater)」のことだと理解することもでき、「ガイアの後身であり、万物ことにも人間を養う穀物を育むものとしての大地 (ガイア) の側面が、特殊化され、神格化されたもの」で、ときにはガイアと同一視されることもある<sup>43)</sup>。一方でレアは、クレタ島を中心にして

38) ホメロス「デーメーテル讃歌」、24 ページ参照。

39) ホメロス「デーメーテル讃歌」、66 ページ (訳註 46) 参照。オデュッセウスはアテネ女神に向かって「そういえばわしもイタケのことは、海上遥かな広大なクレテに在っても聞いていた」、一方で、豚飼いのエウマイオスに対しては「なにを隠そう、わしは広大なクレテの出で、さる長者の俸として生まれたものだ」などと、虚偽の身の上話を語っている。ホメロス、松平千秋訳『オデュッセイア (下)』、岩波文庫、22、44 ページ参照。

40) ヘシオドス、廣川洋一訳『神統記』岩波文庫、120 ページ参照。

41) ディオドロス「神代地誌」、訳註 66 ページ参照。ただし、複数形の母たちが単数形のレアに相当するという点については疑問が残る。例えば高橋は、母たちと複数形で言及されていることを論拠にして、母たちは大地母神に似てはいるものの大地母神そのものではないと論じている。高橋義人「ファウストと冥府への旅——『母たち』の場をめぐる——」(ゲーテ自然科学の集い『モルフォロギア——ゲーテと自然科学——』ナカニシヤ出版、1998 年 (20 号)、51-59 ページ)、54 ページ参照。

42) ヘシオドス『神統記』、195 ページ (『神統記』系譜図 Q) 参照。

43) ホメロス「デーメーテル讃歌」、106-107 ページ (解題) ; J. J. バハオーフェン、

地中海や東方世界全域で信仰されていた女神であり、いろいろな神と同一視され、デメテルと同一視される場合もある<sup>44)</sup>。ヘシオドス (Hesiodos, 生没年不詳) では、クレタ島でゼウスを産むのはレアだが、生まれたゼウスを守り、養い育てたのは大地 (ガイア) である<sup>45)</sup>。

結局、デメテル・ペルセフォネ神話の場合と同じように、これを含むギリシア神話全体が、地中海世界の各地域による差異と歴史の変容の過程の中で、現在の形に整理されたと考えるべきであろう。地中海世界全般の豊饒な大地を神格化したものと言う意味でガイア、レア、デメテル、そしてペルセフォネもまた同じく大地母神であり<sup>46)</sup>、その地域・土地ごとの事情を反映してこれら神格のうちどれかにスポット・ライトが当てられ、それにまつわる神話が伝承されたのだと考えるべきであろう。そして、クレタ島もシチリア島のように「豊饒の地」であり、デメテルがトリプトレモスの名前の由来を彷彿とさせる「三度

吉原達也訳『母権制序説』ちくま学芸文庫、257ページ (訳註45)；ジャンニクロード・ベルフィオール、金光仁三郎主幹、小井戸光彦、本田貴久、大木勲、内藤真奈訳『ラルース ギリシア・ローマ神話大事典』、275ページ (「ガイア」の項) 参照。例えば、エウリピデス (Euripides, 前480頃-前406) 最晩年の作『バックスの信女』では、新参者の神ディオニュソスを嘲るテーバイ王ベンテウスに向かって、預言者テイレシアスが「よろしいか、若殿よ、人間にとって、このうえなく尊いものが二つある。まず女神デメテルがおわす。別の名で称えれば、大地の神と呼んでもよろしい。」と語りかけている (漢字のルビは省略)。エウリピデス、松平千秋訳「バックスの信女」(『ギリシア悲劇Ⅳ エウリピデス (下)』ちくま文庫、447-524ページ)、464ページ参照。

44) ベルフィオール『ラルース ギリシア・ローマ神話大事典』、875ページ (「レア」の項)；ホメーロス「デーメーテール讃歌」、97ページ (訳註113)；Harold Jantz: *The mothers in Faust. The myth of time and creativity.* Johns Hopkins Press (Baltimore) 1969, p. 48 参照。

45) ヘシオドス『神統記』、62-64ページ参照。

46) 整理されたギリシア神話では、デメテルとペルセフォネは別個の神格として語られているが、両者は「元来は大地母神が分化したもので、「大地母神のもつ物質的な側面が発達し、地上での生産物を育む穀物女神となった」のがデメテル、「同じ大地母神の精神的な側面が発達して、地下神的な神格となった」のがペルセフォネだと言うことができる一方で、「穀物女神であり『穀物の母』である」デメテルに対して、ペルセフォネはその分身であり「大地に播かれた種子である『穀物の娘』だ」と言うこともできる。ホメーロス「デーメーテール讃歌」、107-109ページ (解題) 参照。

鋤き返した畝地」で富の神ブルトスを産んだという伝承<sup>47)</sup>も踏まえると、レアに相当する、クレタ島に起源を持つとされるエンギエイオンの母たちは、エンナにおけるデメテルやベルセフォネと同質の女神であり、その原初形態はやはり大地母神と考えていいだろう<sup>48)</sup>。

上述したような、ギリシア神話の地域による多様性、特に自然環境との関係性を示す一例として興味深いのは、ブルタルコスの伝える、マルケルスがシラクアザで手に入れた彫像や絵画を奉納したサモトラケ島のカペイロイの神々である<sup>49)</sup>。ヘロドトスによれば、カペイロイとはギリシア以前の古い宗教に属する、ペラスゴイ人が崇拝していた豊饒の神々であり、サモトラケ島だけでなくレムノス島やギリシア本土でも崇拝されていた<sup>50)</sup>。そして、この神々を祀る密儀は、エレウシスの密儀と同様に有名だった<sup>51)</sup>。ヘロドトスはさらに、カペイロイの像がヘファイストスの像とよく似ており、カペイロイはヘファイストスの子だとする伝承もあると述べている<sup>52)</sup>。カペイロイはヘファイストスの助手であるとの説もある<sup>53)</sup>が、そもそもこの密儀がヘファイストスに関連づけて語られるのは、カペイロイ崇拝が盛んだったサモトラケ島やレムノス島が「地中

47) ヘシオドス『神統記』、120 ページ参照（漢字のルビは省略）。

48) バッハオーフェンの説明によれば、*gya, gyia, gyie* はデメテル (Demeter) の *de* と同じように「大地」を意味する *ge* (ge) と関連しており、エンギエイオン (Engyion) とは文字どりに「大地 (の中) に (in der Erde)」の意味で、クレタ人が建造した町エンギエイオンの母たちは母性的特性を持った大地そのものと理解できる。J. J. Bachofen: *Das Mutterrecht. Eine Untersuchung über die Gynaiokratie der alten Welt nach ihrer religiösen und rechtlichen Natur. Eine Auswahl* hrsg. von H.-J. Heinrichs. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1975, S. 119–120.; J. J. バッハオーフェン、佐藤信行、佐々木充、三浦淳、桑原聡訳『母権論 [序論・リュキア・クレタ]』三元社、157–159 ページ参照。

49) ブルタルコス『英雄伝2』、441 ページ（本文、および注(4)）参照。なお、筆者がカペイロイに関心を持つきっかけとなったのは、Jantz: *The mothers in Faust. The myth of time and creativity*, pp. 47–48; 高橋「ファウストと冥府への旅——『母たち』の場をめぐる——」、58–59 ページ（註8）である。

50) ヘロドトス『歴史 (上)』、225、484 ページ（訳注 225–3）参照。

51) 周藤芳幸、澤田典子『古代ギリシア遺跡事典』東京堂出版、192–193 ページ参照。

52) ヘロドトス『歴史 (上)』、354 ページ参照。

53) ベルフィオール『ラールス ギリシア・ローマ神話大事典』、697–698 ページ（「ヘファイストス」の項）参照。



海火山系」に属し、火と鍛冶の神ヘファイストスの仕事場である火山がある<sup>54)</sup> ことと関係しているからであろう。前に言及した、エトナ山周辺の肥沃な土地をめぐってデメテルとヘファイストスが争ったとの伝承も、「エトナ山→火山→ヘファイストスの仕事場」の連想から生まれたことは間違いない。

一方でディオドロスによれば、カペイロイの密儀はゼウスからイアシオンに伝授されたものである。そして、イアシオンの姉妹ハルモニアが結婚した際に催された神々による祝宴で、デメテルは穀物の粒を贈った<sup>55)</sup>。さらにディオドロスは、イアシオンとデメテルが結ばれてプルтусが生まれたという伝承を、ハルモニアの結婚式で一緒になったイアシオンにデメテルが穀物の富（プルтус）を贈ったという意味である、と読み解いている<sup>56)</sup>。いずれにしても、ディオドロスの説にしたがえば、サモトラケ島の豊饒さもまたデメテルに由来することになるのだが、それどころかカペイロイとはデメテル、ペルセフォネ、ハデス、ヘルメスのことだとする説もある<sup>57)</sup>。この異説は恐らく、ギリシアよりも古いカペイロイの神話が、デメテル・ペルセフォネ神話にとって代わられたことを暗示するものと考えられることができる。

また、エリアーデ (Mircea Eliade, 1907–1986) は、デメテルが「三度鋤き返した畝地」でイアシオンと交わって富の神プルтусを産んだという伝承の中に、耕された畝を女性と、鋤を男根と、農耕作業を生殖行為と同一視し、畑で生殖行為を模倣することにより豊饒を祈願する、古くから世界各地に見られる農耕社会の風習の原型を見てとる。さらに、ガイアとデメテルの同一視の問題を、ガイアがデメテルにとって代わられる、したがって、大地母神が穀物女神にとって代わられるプロセスの結果として捉え、その過程で、デメテルに代表される穀物女神たちは「誕生、豊饒、死のドラマ」を生き始めることになると

54) 呉茂一『ギリシア神話 (上)』新潮文庫、286 ページ参照。

55) デイオドロス「神代地誌」、428 ページ、訳注 73 ページ参照。

56) デイオドロス「神代地誌」、429 ページ参照。

57) デジタル版『ブリタニカ国際大百科事典』、「カペイロイ」の項；周藤、澤田『古代ギリシア遺跡事典』、192 ページ参照。

考える<sup>58)</sup>。デメテルやペルセフォネを代表とする穀物女神に関するドラマ＝神話は、原始的で単純な大地信仰からこうしたプロセスを経て生まれ、地域によりさまざまに形を整えながら出来上がったものと理解できる。

これまで論じてきたように、大地母神はそもそもあらゆるものを生み出し育む、豊饒な大地／自然そのものの神格化であり、これが地域によってさまざまに特殊化された穀物女神にとって代わられた経緯や、ゲーテ自身の自然観などを踏まえると、注41で言及した単数形と複数形の問題についてもそれほど無理なく理解できるのではないだろうか。ゲーテによれば、自然とはきわめて矛盾に満ちたものであり、「無数の名称や述語の中に身を隠すが、つねに同一のもの」<sup>59)</sup>である。そして、ゲーテ自身を含めた詩人は、「一の中に多を見出し、多を一のように感じる」<sup>60)</sup>ことができるからである。

58) エリアーデ、堀一郎監修、久米博訳『エリアーデ著作集 第二巻 豊饒と再生 宗教学概論 2』セリカ書房、160-167 ページ参照。

59) Johann Wolfgang Goethe: Die Natur (Fragment; nicht von Goethe?) . In: Ders.: Erstes Weimarer Jahrzehnt 1775-1786, 2. MA, Bd. 2.2. Hrsg. von H. Schläpfer, H. J. Becker und G. H. Müller. München (Carl Hanser Verlag) 1987, S. 477-479, hier besonders S. 479. この断章『自然』については、第二次スイス旅行の際にゲーテと知り合い、その後ヴァイマルに滞在したこともある若きスイス人神学者トープラー (Georg Christoph Tobler, 1757-1812) が著者である、トープラーがオルフェウス讃歌をドイツ語に散文訳したものに過ぎない、あるいは、1775年から1788年までゲーテの書記を務め、ゲーテと同じような考え方をしていたザイデル (Philipp Friedrich Seidel, 1755-1820) がゲーテの口述を書き留めたものである等、さまざまな説がある。Goethe: Die Natur, S. 872 (Kommentar);ゲーテ、木村直司訳『色彩論』ちくま学芸文庫、2007年、90ページ(「自然一断章」への訳注); Johann Wolfgang Goethe: (Erläuterung zu dem aphoristischen Aufsatz Die Natur). In: Ders.: Letzte Jahre 1827-1832, 2. MA, Bd. 18.2. Hrsg. Von J. John, H. J. Becker, G. H. Müller, J. Neubauer und I. Schmid. München (Carl Hanser Verlag) 1996, S. 1220 (Kommentar) 参照。しかし、ゲーテ自身「このような考察をしたかどうか実際のところ思い出せないのだが、それは、私の精神が当時達していた考えとよく一致している」と述べており、後年重要になってくる「分極性 (Polarität)」と「高進性 (Steigerung)」の概念が欠けているものの、彼の自然観の根底をなす考え方だと見てよいだろう。Vgl. Goethe: (Erläuterung zu dem aphoristischen Aufsatz Die Natur), S. 358-360, hier S. 358-359.

60) Johann Wolfgang Goethe: Weissagungen des Bakis. In: Ders.: Weimarer Klassik 1798-1806, I. MA, Bd. 6.1. Hrsg. von V. Lange. München (Carl Hanser Verlag) 1986, S. 33-40, hier S. 40, S. 890-891 (Kommentar). バキス (Bakis) とは、謎めいた神託

## おわりに

ゲーテは、デメテル神話に彩られたエンナへ向かった自身の経験を土台として、プルタルコスで言及される母たち、ディオドロスによるデメテル・ペルセフォネ神話や母たちに関する記述なども参照しながら、『ファウスト』第2部第1幕の「母たち」の場面を創作したのだろう。この他にも、「母たち」の場面にはゲーテ自身のシチリア旅行における体験が盛り込まれていると思える箇所がいくつかある。例えば、メフィストによる大海原を行くイルカの描写<sup>(61)</sup>は、シチリア島へ渡るためにゲーテがナポリから乗った船を伴走して泳ぐイルカの群れ<sup>(62)</sup>を彷彿とさせるし、「母たち」と聞くたびに戦慄に襲われながらもその世界へと下りて／上って行くファウストの姿は、シチリア旅行に対する非常にアンビバレントなゲーテの言動<sup>(63)</sup>に重なり、また、「母たち」の世界へ向かう

---

を告げるギリシアの伝説上の預言者であり、ゲーテ自身が装う仮面だと考えることもできる。Vgl. Goethe-Wörterbuch (<https://woerterbuchnetz.de/?sigle=GWB&lemid=B00155>). [最終閲覧日：2024年1月3日]

- 61) Vgl. Goethe: Faust. Der Tragödie zweiter Teil, S. 156.
- 62) Vgl. Goethe: Italienische Reise, S. 282.
- 63) ナポリ (Napoli) まで足を延ばしたゲーテは、シチリア島行きをめぐって逡巡しつつも、海を渡る決心をする。しかし、シチリア旅行に対するアンビバレンスは消えてなくなる。遠く離れたシチリアは決して危険な地ではないのだと自分自身に言い聞かせる (1787年3月3日、ナポリ) もの、なかなか決心がつかないうちに時間ばかりが過ぎて行く (3月16日、カゼルタ (Caserta))。パレルモ (Palermo) から船が戻ってくるのを見ると、これに乗ってローマ (Roma) へ戻りたい気持ちとシチリアへ渡りたい気持ちが交錯して決心がつかず、最後は何かちよっとした偶然によってどちらかに決まるのだらうと、自ら決断することを放棄したくなる (3月17日、ナポリ)。ようやく決心がついてパレルモ行きが3日後に迫っても、あらかじめ決めた期日までにローマに戻らなければならない、シチリア旅行で予定が大幅に狂ってはならないなどと、シチリア旅行が終わった後のことをすでに心配している (3月26日、ナポリ)。そして、コルベット艦に乗船して海路パレルモへ向かった (3月29日) ゲーテは、ひどい船酔いに悩まされながらも、なんとかシチリアに到着した。しかし、ナポリに戻るとヘルダーに宛てて、手っ取り早くシチリア旅行を済ませた、サレルノ (Salerno) のペストゥム (Paestum) にある神殿はシチリアで見るとんなものよりも優れているなどと、シチリア旅行がまるでたいしたことではなかったかのように伝えている (5月17日)。その一方で、「第二次ロー

ファウストが頼りにする鍵は、「このシチリアにこそ、一切を解き明かす鍵があるのだ」<sup>64)</sup>というゲーテの言葉を思い起こさせる。とりわけ、「母たち」の世界の目印となる三脚の鼎は、そのままシチリア島の隠喩として理解できる。

シチリア島は昔、三つの岬を持ち三角形の形状をしていることから「トリナクリア (Trinacria)」と呼ばれていた<sup>65)</sup>。そして、この三つの岬を三本の足に置き換えたものが島のシンボルとして昔の黒絵／黒像式陶器 (画像2) や、現在のシチリア州旗 (画像3)、陶製のお土産 (画像4) などのデザインとなっている。画像2でははっきりしないが、画像3と4では、三本の足の交点となる中央部分に女性の顔が描かれ、その顔を前者は三本の穀物 (麦) の穂、後者ではへびが縁取っている。女性の顔の左右両端には、どちらも翼がついている。以上の特徴から、画像4の中央部分はギリシア神話に登場するメドゥサを表していると考えて間違いない。メドゥサは、ゴルゴン三姉妹の一人で、イノシシの牙と青銅の手と黄金の翼を持ち、頭には頭髮の代わりにへびが生えていると言われる。そして、海神ポセイドンの子どもを宿したメドゥサは、ペルセウスに首を切り落とされるのだが、その際にほとぼしり出た血液から天馬バガソスが生まれ出た。これと同じように、デメテルもまたポセイドンと交わり、駿馬アレイオン／アリオンを産んだ。この相似性から、メドゥサとデメテルは同一の女神と言ってよく、穀物女神デメテルのアトリビュートである穀物 (麦) の穂に縁取られた、シチリア州旗に描かれた女性の顔もやはりデメテル＝メドゥサだと考えられる<sup>66)</sup>。

穀物女神デメテル (メドゥサ) の顔を中心に据え、三本足＝三つの岬を持つ

---

マ滞在」の最後では、シチリア旅行に同行した画家クニープ (Christoph Heinrich Kniep, 1755-1825) が送ってきた水彩画を眺めながら、感慨深げにシチリアのことを回顧している。Vgl. Goethe: Italienische Reise, S. 231, 257, 261-262, 277, 280-281, 392-393, 640.

64) Goethe: Italienische Reise, S. 313.

65) デイオドロス「神代地誌」、386ページ、訳注67ページ参照。

66) ヘシオドス『神統記』、192ページ (『神統記』系譜図L)；オウィディウス『変身物語 (上)』、175ページ；呉『ギリシア神話 (上)』、318-320、426ページ；ペルフィオール『ラルース ギリシア・ローマ神話大事典』大修館書店、757ページ (「ポセイドン」の項)、823ページ (「メドゥーサ」の項) 参照。

トリナクリアはまさにデメテルとペルセフォネが住むと伝えられるシチリア島の豊饒さを象徴するものだが、これを「母たち」の世界の目印となる三脚の鼎とつなげることに、それほど無理はないだろう。そして、イタリアの穀倉であるシチリア島に向かうゲーテの姿、島の中心部に位置し、デメテル・ペルセフォネの神話に包まれたエンナに向かうゲーテの姿は、「母たち」の世界に向かうファウストの姿に容易に重ねられる。

一方で、三脚の鼎はまた、デルフォイの神託を告げる巫女が使用していた鼎を連想させる。真偽のほどは定かでないようだが、巫女は鼎の上に座り神託所床下の岩の割れ目から噴き出す蒸気を吸って、一種のトランス状態になりながら神託を告げていたと言われている。そして、この神託で有名なデルフォイは、アポロンの所有となるまでは大地母神ガイアのものとしていた。ここでもまた、三脚の鼎を媒介にして穀物女神デメテル、「母たち」、そして大地母神ガイアの関係性の問題が浮かび上がってくる。

さらに、1814年以降ゲーテの秘書を務めていたリーマー (Friedrich Wilhelm Riemer, 1774-1845) の証言によれば、「母たち」との関連で後年ゲーテの記憶に残っていたのは、プルタルコスの『英雄伝』よりはむしろ『モラリア』の方である<sup>67)</sup>。この『モラリア』の中で、しばしば「母たち」の世界に結びつけて論じられてきた<sup>68)</sup>のが、「神託の衰微について」の中でクレオンプロトスが紹介する、ある異民族の男が語った宇宙論である。

宇宙は無限でも一つでも五つでもなく、一八三個である。それは三角形のかたちに整理されていて、[中略]そして三角形の内側の平面はすべての宇宙に共通の炉床であり、『真理の野』と呼ばれ、そのなかにはかつて生成したものとこれから生成しようとするものとの、理 (ロゴス) と形相

---

67) Vgl. Friedrich Wilhelm Riemer: Mitteilungen über Goethe. Auf Grund der Ausgabe von 1841 und des handschriftlichen Nachlasses. Legare Street Press, 2022, S. 187-188.

68) 高橋「ファウストと冥府への旅——『母たち』の場をめぐって——」、56-57ページ参照。

(エイロス)と範型(パラダイグマ)とが不動のものとしておかれている。<sup>69)</sup>

三角形に整理された宇宙は、三つの岬を持ち三角形の形状をしているシチリア島のイメージと重なる。そして、三角形の内側にある、すべての宇宙に共通の炉床「真理の野」は三脚の鼎、さらに、鼎の上に座った巫女が神託を告げていたデルフォイの神託所を思い起こさせる一方で、シチリア島の中心部に位置し、デメテルやペルセフォネなどの神話に彩られた「シチリアのへそ」エンナをも彷彿とさせる。「かつて生成したものとこれから生成しようとするものとの、理(ロゴス)と形相(エイロス)と範型(パラダイグマ)とが不動のものとしておかれている」真理の野の問題については、「母たち」の世界、そしてまた「原植物(Urpflanze)」の問題とも関連づけて論じる必要がある<sup>70)</sup>が、これについてはまた稿を改めて扱いたい。

---

69) プルタルコス、丸橋裕訳「神託の衰微について」(同『モラリア 5』(西洋古典叢書)京都大学学術出版会、235-333 ページ)、280 ページ。

70) 高橋「ファウストと冥府への旅——『母たち』の場をめぐる——」、57 ページ参照。

# Demeter und Mütter

## — Vorstudie zur Erforschung der Bedeutung der Sizilienreise für Goethe

Shigemi Watanabe

Es wird oft darauf hingewiesen, dass Goethe durch seine Italienreise als Dichter wiedergeboren wurde, und es scheint, dass seine Erfahrungen auf Sizilien einen großen Einfluss auf seine spätere Dichtung und Denkweise hatten. Zum Beispiel ist die „Mütter“-Szene im ersten Akt von „Faust II“ als literarische Verarbeitung von Goethes Besuch in Enna zu verstehen, welches im Zentrum der Insel liegt und von der Mythologie der Demeter umwoben ist.

Es ranken sich verschiedene Mythen um Demeter. Eine Variante, die in Ovids „Metamorphosen“ zu finden ist, hatte Goethe in der Bibliothek seines Vaters gelesen, und hatte sie wahrscheinlich auf der Reise im Gedächtnis. Nachdem er Agrigent verlassen hatte, bestimmte er das Reiseziel „nach einem mythologischen Namen“ und machte sich auf den Weg ins Landesinnere nach Enna. Obwohl seine Erfahrungen dort schrecklich waren, muss sich die Erinnerung an diese Reise durch den „Nabel Siziliens“ tief in sein Herz eingepägt haben.

Später erzählte Goethe Eckermann von der Entstehung der „Mütter“-Szene und erklärte ihm, dass er Plutarch als Referenz verwendet hatte. Die Mütter werden nämlich in Plutarchs „Vergleichenden Lebensbeschreibungen“ im Zusammenhang mit Marcellus erwähnt, dem römischen Feldherrn und Politiker, der in den Punischen Kriegen kämpfte. Tatsächlich hatte Goethe während seines Aufenthalts in Karlsbad vom 17. Mai bis zum 28. Juni 1811 diese „Lebensbeschreibungen“ in der deutschen Übersetzung von Kaltwasser gelesen. Ebenso hatte er vom 5. Dezember 1812 bis zum 15. Januar 1813 Diodors „Historische Bibliothek“, in der auch verschiedene Mythen über Demeter und die Beschreibungen der Mütter enthalten sind, aus der Weimarer Bibliothek ausgeliehen.

Der Schwerpunkt der vorliegenden Abhandlung liegt auf der Argumentation, dass die Getreidegöttin Demeter und die Mütter, die bei Plutarch und Diodor als Gottheiten erwähnt werden, beides regional-spezifische Vergöttlichungen der Erde/Natur und in diesem Sinne äquivalent sind. Durch den Nachweis, dass Goethes Erfahrungen auf Sizilien, verbunden mit seiner Plutarch- und Diodor-Lektüre, später in der „Mütter“-Szene in „Faust II“ ihren Niederschlag fanden, versteht sich die vorliegende Arbeit als eine Vorstudie zur Erforschung der Bedeutung der Sizilienreise für Goethe.

画像 1



作成 - 大西英文

大西英文訳「ウェッレス弾劾I」(岡道男、片山英男、久保正彰、中務哲郎編集「キケロー選集4 法廷・政治弁論IV」岩波書店)

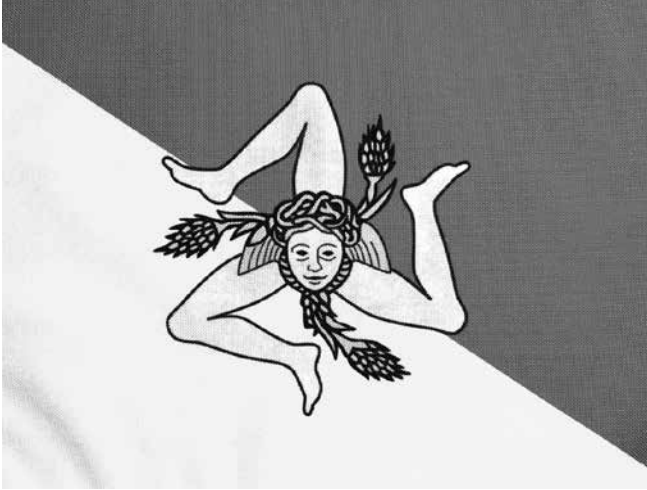
画像 2



アグリジェント州立考古学博物館にて筆者撮影 (2014年3月26日)



画像 3



筆者撮影 (2024年1月19日)

画像 4



筆者撮影 (2024年1月2日)